

第55回車座集会（環境局・高津区）摘録

- 1 開催日時 令和5年2月16日（木） 午後2時30分から午後4時30分まで
- 2 場 所 高津区役所
- 3 参加者等 58名（ゲストスピーカー5名、参加者38名、傍聴者15名）

<開会>

司会：定刻となりましたので、ただいまから第55回車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます環境局脱炭素戦略推進室、井田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日の車座集会は、「子どもたちが安心して心豊かに暮らせる脱炭素社会に向けて～みぞのくち発・脱炭素ムーブメントを起こす～」と題して、いろいろな方々から、広く率直な意見をいただき、ゲストスピーカーなど環境活動に取り組む各主体の活動のバージョンアップに資するとともに、参加者の方々にもアクションを起こすきっかけとしていただくことを目的に、市長と皆さんで意見交換を行っていただきます。

本日は、積極的に環境活動を実践している団体から5名の方をゲストスピーカーとしてご参加いただいておりますので、ここでご紹介をさせていただきます。順にお名前をお呼びいたします。

富士通株式会社未来社会&テクノロジー本部マネジャー、池田圭佑様

川崎市地球温暖化防止活動推進センターセンター長、庄司佳子様

脱炭素かわさき市民会議プラットフォーム、田邊未希様

かわさき若者会議発起人、中野絢斗様

川崎市総合教育センターカリキュラムセンター指導主事、山城祥二様

司会：皆様、本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

また、ゲストスピーカーの皆様に加えまして、ステークホルダーになり得る方、これから巻き込むべき方々など、市内で活動する若者、子育て世代、市内で働く現役世代など、環境活動の実績の有無を問わず、幅広い方々にご参加いただいております。皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

続きまして、行政からの出席者をご紹介します。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：今日はよろしくお願ひします。

司会：鈴木哲朗高津区長でございます。

鈴木区長：よろしくお願ひいたします。

司会：三田村有也環境局長でございます。

三田村環境局長：よろしくお願ひいたします。

司会：それでは、まず、開会に当たりまして、福田市長からご挨拶を申し上げます。よろしくお願ひいたします。

<市長挨拶>

市長：改めまして、こんにちは。市長の福田紀彦です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

もう55回目を迎えました車座集会ですけれども、この1か月で3回ぐらいやっているのではないかと、急速に今やっています。なかなかコロナの影響で、こうやって対面で車座というわけにもいかなかったものですから、それをキャッチアップするぐらい今急いでやっているという感じで、今日は脱炭素社会をどうやって実現するかというテーマで、高津区の会場でお願いします。

実は、2030年までに、川崎市は温室効果ガス、CO₂を2013年度比で50%削減するという非常に高い目標、国は46%ですが、それを上回るところにターゲットを置いています。2050年のカーボンニュートラルを実現するにはそのぐらい減らさないと、到底2050年に脱炭素社会の実現というのがないので、今でもかなり高いハードルですけれども、それでもやっていかないと2050年には無理ということなので、みんなで総力を挙げてやっていかなくては行けないと。だから、誰かがやるということではなくて、みんなでやるということが大事で、それも強力に、ということなんです。

今日、目指したいものは、やはり皆さん、意識は持っているんだけど、どういうことをやればいいのかとか、あるいはもっと人を巻き込むためにはどうしたらいいのかということ、世界全体でやらなくては行けないことなんですけど、やっぱり私たちの足元からということで、この溝口からこの脱炭素ドミノを起こしていく、そのためにはどうしていったらいいのかということ、をみんなで話し合えればと思っています。

今日は短い時間ですけれども、皆さんから忌憚のないご意見をいただいて、実りのある車座集会にしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

<開催趣旨説明>

司会：市長、ありがとうございました。

続きまして、高津区長から、イントロダクションとして、高津区での脱炭素アクションについて紹介をさせていただきます。

鈴木区長：ご紹介いただきました高津区長の鈴木哲朗です。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

今、市長からもお話がありましたが、この高津区、溝口の場所で「脱炭素アクションみぞのくち」というのが今取り組まれています。2050年にはCO₂の排出を実質ゼロにしていこうということで、2030年を1つのマイルストーン、中間地点として目指して、脱炭素アクションに取り組んでいるところですが、2021年の7月に「脱炭素アクションみぞのくち」という取組を立ち上げました。環境配慮型のライフスタイル、行動変容をしていこう、この地元、地に足の着いたところで、溝口からやっていこうということです。

では、なぜ溝口かといいますと、今日、ここにお集まりの皆さんたちだけではなくて、子供たちの、子供たちのさらにその子供たちの世代にまで今の環境をいかに残していくのか、皆さん方に考え、取り組んでいただこうと、そういった考えで川崎の中でも、特に溝口という場所は、皆さんももう体感されていると思いますが、気取らずにカジュアルに過ごせるまちであるとともに、少し気取っておしゃれにもライフスタイルを過ごせるところでもあります。位置関係でいいますと、東京都世田谷区と横浜市青葉区と非常に近いところにありますが、そんなところにありながら、溝口であえてこの行動を提起していくことによって、発信力があるのではという考えが1つです。

また、この溝口を中心に高津区というエリアは、多くの企業、事業者の方たちが所在していっぱいます。川崎市の中でもこれだけ多くの企業、事業所が所在するのは、川崎市の中の北限というふうに考えております。つまり、それは、多くの企業、事業者の方たちと皆様市民の方たち、そして私たち行

政が一丸となって、さらに加速度的にこの脱炭素アクションの取組を進めることができる可能性、ポテンシャルを持っているのがこの溝口を中心とした高津区、溝口エリアだということでこの取組を進めています。

本日は、皆さんから未来に向けて、わくわくするような明るい未来を描けるような、そういった活発なご議論をいただきたいと思っておりますので、どうぞ本日はよろしく願いいたします。

司会：鈴木区長、どうもありがとうございます。

続きまして、本日の車座集会の進め方について、前方のスクリーンで簡単に説明させていただきます。

車座集会のテーマは、「子どもたちが安心して心豊かに暮らせる脱炭素社会に向けて～みぞのくち発・脱炭素ムーブメントを起こす～」でございます。本日は、それぞれの立場や考えを共有しながら意見交換を行い、議論を深めさせていただければと思います。

進め方ですが、STEP1としまして、ゲストスピーカーから活動内容や環境問題に取り組み始めたきっかけなどをご紹介いただきまして、環境問題に取り組むきっかけやヒントを皆さんと共有できればと考えています。

次に、STEP2としまして、ゲストスピーカーが環境活動に取り組み始めたきっかけなどを参考に、参加者の皆様の本音や、どういう取組なら参加したいと思えるかなど、意見交換をさせていただき、どのようにしたら脱炭素の活動に取り組む関係者を増やし、ムーブメントを起こせるかについて、皆さんで議論を深めてまいりたいと考えているところです。

また、意見交換の方法ですけれども、参加者の皆様にはお手元にホワイトボードを用意させていただいておりますので、考えなどを記載いただき、指名された後、ご発言をいただければと思います。ご発言される際には、所属、社名等は不要です。お名前をおっしゃっていただいた上でご発言をお願いします。また、職員がマイクをお届けしますので、お手元にマイクが届いてからご発言をお願いします。多くの方々に発言いただくため、発言は1、2分程度でお願いできればと思います。ご協力のほど、よろしく願いいたします。

それでは、これより福田市長にモデレーターをお願いしたいと思っております。

<STEP1 ゲストスピーカーの活動及び取組を始めたきっかけを紹介>

市長：鈴木区長から「脱炭素アクションみぞのくち」の話がありましたけれども、国から脱炭素先行地域というもの全国で13か所選ばれたうちの1つとなっています。ここは、ほとんどの地域が結構地方というか、小さなまちが選ばれているケースが多いですけれども、川崎市のような都市部でこの先行地域に選ばれたというのは非常に珍しいと。ですから、川崎での取組、脱炭素を実現していく取組というのは、全国の都市のモデルになっていく。だから、ここにいらっしゃる人たち、高津区民の皆さんの取組というのは、おそらく全国、あるいは世界の都市のモデルになっていくという、そういう気概でもってやっていければと思っています。

それでは、今日は大変お忙しい中、5名のゲストスピーカーの方々に来ていただきました。ゲストスピーカーの皆さんには、まずどんな活動をしているのかということと、それから何らかの活動するに当たっての皆さんそれぞれにきっかけがあったはずだということなので、ぜひ私たちみんなで参考にしていきたいので、それぞれにご発言をいただきたいと思っております。

それでは、池田さんからお願いできますか。

池田さん：富士通の池田と申します。今日はこのような機会をいただきましてありがとうございます。

私は、富士通に所属して、川崎市とのまちづくりをメインのミッションとしておりまして、その中で

も環境の分野においては、溝口の、高津区の皆様、あとは川崎市の環境局の皆様にご協力いただいて、脱炭素社会の実現に向けた議論をいろいろとさせていただいているという状況です。

私自身が、環境の中でも脱炭素社会実現に向けて取り組むきっかけとなったのは、川崎市の環境局の皆様とのディスカッションの場でした。私自身も、ハッとさせられたのですが、川崎市は政令指定都市の中でナンバーワンの炭素排出量であると、非常に大きな課題であるということで、そういった課題に取り組ませていただきたいと、そういうすごく大きなマインドで取り組ませていただいたというのがきっかけです。

私たち富士通は、武蔵中原駅前に工場を構えておりまして、その周辺エリアでまちづくりをぜひ川崎市さんと一緒にやらせていただきたいというところでスタートしているのですが、4つの重点テーマがある中の、下の段にあるのですが、環境においては、ここ溝口の場を拠点にいろんな活動を、市民の方々とか、行政の皆様にご協力いただきながら進めているところです。

そんな中で、我々が今取り組んでいる具体的な内容としては、10月31日から、市民の皆様にご自発的に環境に良い行動を自然な形で取っていただくためにはどんなアプローチが重要なのか、大事なのか、あとは適切なのかというところを実証的に捉えさせていただくということで、みんながつながる環境アプリ、アプリケーションをリリースさせていただいております。

具体的にはどんなアプリケーションかといいますと、環境ポイントというところを軸に進めさせていただいているのですが、日々の行動記録、どういった環境活動をしているかというアンケート、環境に良い行動をしたらSNSに投稿してもらう機能、あとはこの取組には15社の企業さんに乗っかっていただいているのですが、その企業さんが取り組んでいる環境活動を学んでいただくコンテンツとかイベント、こういったものに参加していただくことでポイントがたまるというような仕組みになっておりまして、そのポイントを実際に環境に良い商品に使っていただくということで、こういったサイクルを回すことで脱炭素社会の実現に寄与できないかとスタートしております。

実際に今どういう状態になっているかというところ、これは実際にSNSのところですが、ペットボトルの分別の方法の共有とか、ユーザー間の励まし合いとか、あとはサービスの企業の反響とか、そういったものが随所に見られ始めておりまして、徐々にこのコミュニティーが動き始めたというような状況が見えてきております。これも実際に実証としてやらせていただくことで見えてきた結果であると思っておりますので、我々としてもこういったトライ&エラーをどんどん繰り返していきたいと思っております。

今後、こういった活動を川崎市、まずは高津区に根づかせていくために、大きく3つの取組を考えております。

1つが、市民向けのイベント企画で、ちょうど今週の日曜日にイベントを開催するのですが、「清走中」ということで、テレビ番組の「逃走中」のパロディーで、みんなでミッションをクリアしながらごみ拾いをしていくというイベントを企画させていただきました。これは、環境局の皆さんとか高津区の皆さんに絶大な協力をいただいて今回実現するものですが、1個面白い話がありまして、先日、宮内中学校の学生の方と議論する中で、この期間がちょうど期末テストのタイミングと重なっていてイベントに参加できないという中で、学生自らが企画して、こういうのをやろうよというようなことが話として上がったということで、これは我々が本当に目指しているムーブメントを起こすきっかけになったのではないかと考えていまして、こういったものをどんどん続けていきたいということと、我々がまちづくりをトライしていく中で、やっぱり市民の声をしっかりと聞きに行くということで、いろいろなイベントに参加させていただいたり。あと今後の構想としては、今回のアプリケーションの中で、本当に積極的に使ってくれる市民の方がいらっしゃるということが分かりました。そういった方が、例えば区ごとのアンバサダーというふうにして、彼らを中心に自走していくコミュニティーをつくつ

ていくような、そういった仕掛けを、富士通がデジタル的にフォローしていくことができないか、そういった観点でも、今後、脱炭素のまち溝口を進めていくときに少しでも貢献できればと思っています。私の環境に対するきっかけと概要は以上です。

市長：このアプリ、すごくよくできているんです。ぜひダウンロードしていただいて、これも1つのアクションですから、もう今日から、今から始められるアクションの1つだと思います。参加していただくと面白いものがたくさん見えてくると思いますので、ぜひよろしく願います。「逃走中」じゃなくて「清走中」。むちゃくちゃ面白いですね。ありがとうございました。

庄司さん：川崎市地球温暖化防止活動推進センターのセンター長、庄司です。

センターは高津区の溝口、ノクティの11階にあるんです。来たことある方、たくさんいらっしゃいますかね。ちょっと手を挙げていただけますか。結構いるということで、ちょっとほっとしました。

いろいろな温暖化の発信、相談、事業、環境学習等々をやっているのですが、例えばサステイナブルファッションの展示をしたり、夏休みとか春休みは環境フォーラムといった、いろんな事業者さんとも協力していただいて、体験型の学習の場を提供したりしています。そのほかに、今年からは、中小企業の脱炭素化、「炭素の見える化」事業のきっかけづくりをまずしていこう、この脱炭素社会に向けて、経営からもアプローチしようということで、取組も始めています。

センターでは、温暖化防止活動推進員という方が、今、市内に87名いらっしゃるんですけど、各区、それからテーマ別にいろいろな取組をしていらっしゃるんです。特にテーマ別のプロジェクトは6プロジェクトあるんですが、省エネ、ライフスタイルとかいろいろなテーマでやっていらっしゃるんですが、なんと去年は92校、1万1,235名の生徒さんにアプローチできたんです。学校でどんなことが一番関心があるのかというと、脱炭素、SDGsです。やっぱりすごく関心が高まっているというのを、私たち、依頼するテーマのタイトルでひしひしと感じています。

そのほかに、各区でも活動していて、区役所と川崎市とセンターと共同で脱炭素キャンペーンを始めました。各区にいろいろなイベントに伺って、脱炭素の、市長もいつもおっしゃっている危機感の共有、これをまず皆さんと一緒にになって脱炭素のことを知ってもらって、やっぱり何かをしなくちゃいけないよねということを感じていただく、そういう場を今つくっています。また、来年度はもう少しステップアップしていきたいなと思っています。

そのほかに、「脱炭素アクションみぞのくち」の創出プロジェクトというのがあって、今4つのプロジェクトが動いているんですけど、それにもセンターとして参加していますが、本当に身近なテーマから取り組んで、そして多くの方を巻き込んでいきたいということでやっているのですが、面白かったのが、富士通ゼネラルさんと一緒にやった「脱炭素」×「健康」。健康って、皆さん関心がありますよね。それと脱炭素ってどう関係するの、みたいなどころから多くの人に関心を持っていただけるということで。各プロジェクトは今いろいろな取組をして、発信しています。

11月には「脱炭素アクションみぞのくち」のイベント。私たちも若い世代の方と一緒に、センターでサテライト会場としてやらせていただきました。若者会議の方にも参加していただいたのですが、やっぱり若い方と一緒にやるということで、子供たちがすごく生き生きと取り組むんですよ。こういったのはぜひ続けていきたいと思っています。

太陽光パネルの、川崎にもっともっと増えてほしいなんていうワークショップ等々もやっております。この後、田邊さんからきっと紹介されるだろう脱炭素かわさき市民会議の開催なども行って、それが今いろいろな形で活動が広がっているところです。

私たちセンターの講座で発信したいこと、いろいろなアクティビティを用意するのですが、それに

参加することで視点とか知識をより深く理解することをサポートしていきたいし、参加者の方には集団的なアクション、「清走中」もまさにそうだと思うのですが、そういったアクションを経験することで自分の感性をよりポジティブな変化につなげながら、変革につなげる成果を経験する、そのような場をたくさんつくれたらいいと思います。

最後に、私の取組のきっかけは、自分の家のそばにある小さな矢上川という川が汚かったのですけれど、それを何とかしたいということから講座をしたというのが最初のきっかけだったんです。ただ、それって、水循環と、私たちが飲む水と出している水って、全然別のところなんですよ。そういった水循環がうまくいっていないとか、生物多様性とまちとか、いろんな体験活動とか、あと災害、水災害とかが今問題になっていますよね。そういうものと密接にいろいろなものが絡まっていると思うんです。体験を通して学ぶ自然とか生き物、人との共生、まちの在り方、私たちの生活、こんなことを考えると、どこかから地球は始まっているんじゃない、私の足元から地球は始まっているんだということを、いつも子供たちにも伝えるようにしています。

市長：庄司さん、ありがとうございました。

子供たちの意識が非常に高いと言っていて、私もすごく感じます。川崎の子供たちは環境意識が本当に高いと思いますし、どこの学校に行っても今SDGsのことを学んでいますし、脱炭素のことをすごく勉強しているので、もう大人のほうが全然やられちゃうぐらいの、いいことだと思っています。

庄司さん：そうですね。

市長：中心的な役割を担っていただいて、いろいろなところにつないでいただいている、庄司さんのところのセンターの活動をご紹介いただきました。本当にありがとうございます。また、後ほどコメントをいただきたいと思います。

市長：それでは、田邊さん、よろしく願いいたします。

田邊さん：脱炭素かわさき市民会議プラットフォームの田邊と申します。本日は、皆様、貴重なお時間をいただき、誠にありがとうございます。

私からは、脱炭素かわさき市民会議とその広がりというテーマで少しお話をさせていただきます。

脱炭素かわさき市民会議では何をしたのか、その市民会議に参加した後、私にどんな変化があったのか、その後、会議の後にプラットフォームというものをつくったんですけれども、プラットフォームの活動ではどんなものをしているのか、また、プラットフォームでは今後どのような活動をしていきたいのかというお話をさせていただきます。

私は本当に何の変哲もない多摩区に住んでいる主婦なので、このような場でお話しさせていただくのを自分自身でとても不思議に思っているのですが、全てはこの脱炭素かわさき市民会議というものに参加したのがきっかけです。

こちらは、2021年5月から10月に開催された川崎市150万人の中から無作為抽出によって選ばれた市民75名で行った会議です。私にも突然お誘いの案内が届きまして、150万人もいる中で偶然選ばれたなんて、これはもうご縁と思って参加させていただきました。参加した75名は、年齢、性別、居住区などにおいて、できる限り偏りなく、川崎市の縮図になるように割合を調整して構成された一般の人の集まりでした。もちろん脱炭素に関する知識や経験も様々で、そんなメンバーが専門家の講義を受け、ファシリテーターやアドバイザーのサポートにより討議を進め、77項目の市民提案が完成

し、同年11月に市長に有志が届けました。

私がこの会議に参加して変化したことが大きく3点あります。まず、意識の面では脱炭素社会に関する知識が増えたことで、実現が非常に難しいということも実感しました。会議では、移動、住まい、消費の3つの分野に分けて討議を行ったのですが、それに限らず、生活の全てにおいて、これまでの経緯や現状、人々の関わり方というのがある中で、それぞれに行政、企業、地域市民、あらゆる分野との連携をする必要があり、非常に複雑です。しかし、後でお話するんですけれども、それこそがとても重要だということが分かりました。

2つ目は、自分自身の消費行動が変化したことです。今、このペットボトルを買うか、買わないかという1つの選択だけでも、メーカーにメッセージを伝えることになります。その意味で、買物1つ1つをよく考えるようになりました。市民1人の消費活動を変えることで脱炭素に向けて取り組んでいる企業を応援できますし、反対に、たとえ安価であっても、バージンプラスチックを多用していたり、輸送コストが高そうだったり、そういった環境負荷の高いものの購入を控えるようになりました。

3つ目は、「脱炭素かわさき市民会議プラットフォーム」に参加したことです。プラットフォームというのは、会議終了後にさらに活動していきたいという有志の集まりです。私は、本業もデザイン関係でグラフィックができるので、自分のできることとして、市民会議やセミナーのPR資料づくりを微力ながらやらせていただいています。本日、皆様にお配りしているパンフレットも作らせていただきました。

次に、プラットフォームではどのような活動をしているかというご紹介をします。

1つ目は、勉強会の開催です。これまでに川崎キングスカイフロント東急REIホテルのサステイナブルな取組を見学したり、紙おむつのリサイクルについて、専門家を招いてオンラインセミナーを行いました。または、EV化に向けての課題の1つである集合住宅への充電設備の設置に関するセミナーも来週行う予定です。

2つ目は、市民会議で得られた知見の共有と拡散です。川崎市で行われた市民会議を受けて、ほかの自治体や団体でも一般市民を巻き込んだ会議を立ち上げる動きが広がっており、そのノウハウについて問合せが数多く寄せられています。市民会議を主催した事務局が作成した詳細な報告書を発表するとともに、それぞれ川崎とは状況の異なる団体に対してアドバイスを行っています。

3つ目は情報共有です。プラットフォームの会合を開いて、おのおのの活動報告をしたり、メーリングリストやSlackで地域や行政の動きなどを投稿、拡散などをしております。

こちらを見ていただきたいのですが、最後に今後のプラットフォームの取組に関してです。今後のキーワードは協働であると、私たちは考えています。こちらは、先日行った紙おむつのリサイクルセミナーで学んだ福岡市の取組です。行政である福岡市とリサイクル技術を提供する企業、そして地域組織である保育園が協働し、保育園で出る紙おむつを回収し、リサイクルをしています。これは、リサイクルシステム構築に向けたテストというだけでなく、子供が回収ボックスにおむつをぽいっと入れると、廃棄物をリサイクルすることによって、海の生き物、ウミガメが喜ぶというアニメーションが見られて、これは環境教育としても機能しています。このような取組こそ、まさに今後私たちがやるべきお手本ではないかと私は感じました。

市民提案では、2050年のカーボンニュートラルを見据えて、市民目線からの77の具体的な取組を提出しました。その中には、市民の行動変容を掲げるとともに、企業、NPO、地域組織、行政との協働で進めるべき取組が盛り込まれています。今こそ、私たち市民の行動変容が何よりも大事です。しかし、個人としてできることには限界があります。今、ご紹介した紙おむつのリサイクルシステムのような協働を実現するためには、その3者が目的を共有して、役割を分担して、それぞれ行動に移していく必要があります。

川崎市の計画が策定されて、2050年に向けた大きな方向性は示されました。しかし、その具体化に向けては、普及啓発だけではもう間に合いません。私たちは市民会議で議論を深めていく過程で、市民の行動変容には市民を取り巻く生活環境や社会インフラ、仕組みが密接に関わっていて、その変革や対策の強化が非常に大事であるということに気づきました。行政や企業の脱炭素社会にするんだという明確な意思や行動とともに、多くの市民の行動の変化は実現して加速されるのだと思っております。ぜひ、私たちの市民提案の活動が単なるイベントに終わらないよう、行政の方々、経済活動を支えてくださっている企業、先行して課題に取り組んでいらっしゃる地域団体の皆さん、私たち生活者と一緒に取り組んでいただきたいと思います。この3者の協働の取組が川崎市のいたるところで実現することを心より願っております。

市長： 田邊さんの1番最初のきっかけというのが気候変動会議でしたよね。まさに無作為抽出で、突然、参加しませんかというのが来ると。実は、企画された柳下さんという方が、この話を、こういうのをパリで、気候変動の会議、市民会議というのがフランスで行われて、まさに大統領にこういう市民提案を行ったというのを、これを川崎版でもやってみようというお話をいただいたときに、150万人いるのだから150人でやりませんかというふうな話を逆に提案したら、それではちょっと多過ぎると、じゃあ半分でいこうと、75人というふうになったのですけれども。

本当にすばらしい。田邊さん、本当に全く環境に対するきっかけはなかったですか。

田邊さん：興味はありましたが、そこまで真剣にやっているということは一切ありませんでした。そういう意味では、一般市民という・・・。

市長：そういう意味では、田邊さんのような無作為で選ばれた方が、自ら行動変容をされて、そしてさらに人を巻き込んでいこうという取組をされている、非常に感銘を受けています。

田邊さんがおっしゃった消費者のパワーというのは、本当に強いパワフルなものだと思います。僕も実はここに来るときに、コーヒーを飲んでいたのでですけど、ハッて。昨日、あるグローバル企業の社長さんと話をしていたら、この食べ物、この飲物、一体どのくらいライフサイクルコストというか、生産からここに届くまで、どのくらい炭素を出しているのかというのが見える化できると本当にいいよねという話をされていました。確かにこのコーヒー豆はどこから来たのだろうか。生産される方は、どのくらいCO₂を出しているのだろうか。ここに持ってこられるまでの物流的にどうだったのだろうかということが全部、もし見えるとすれば、私たちの消費にも大きな変化が起きるのではないかと思いますし、そこまで見えなくても分かるものがあるので、消費者としてそういった企業や商品、サービスというものを選んでいくというのは、行動変容、会社としても変えていくという、とても大きな力になると思います。

それから、行政の役割ってあると田邊さんからおっしゃっていただきました。確かにこういう流れをつくっていくためには、行政の仕組みを変えるということは、とても小さくないと思っています。そういった意味で、この3者がどうやって協力をしていくか、キーワード「協働」という言葉が出てきましたけれども、私たちの行政としてもしっかりここはやらなくちゃいけない、具体的なアクションでやっていかななくちゃいけないと思わせていただきました。すばらしいプレゼンテーションをありがとうございました。

市長：それでは、若者会議の中野さん、お願いします。

中野さん：かわさき若者会議の発起人をしております中野絢斗と申します。今日は、我々の団体の紹介と、環境分野の取組を中心としてご紹介できればと思っております。

私自身ですが、今は社会人と大学院生を両立しております、社会人と大学生という肩書です。我々の団体、多分ご存じない方のほうが多いと思いますのでご紹介しますが、我々環境団体というわけではなくて、市内の若者団体です。25歳以下の若者たちで構成している、プラットフォームと我々は呼んでいるんですけれども、25歳以下というくくりでやっております。下限の年齢は決めていませんで、0歳から25歳という団体です。なかなか0歳児は入ってこないの、最年少は今、中学1年生ですけれども、今日、PTAとか子ども会議の関係の方もいらっしゃっておりますけれども、川崎市は子供の権利とか、子供の活躍というところにも力を入れておりますが、我々も子供を巻き込んで、世代関係なく取り組んでいけたらということで25歳以下というくくりでやらせていただいています。若者と若者をつなげて、若者と地域とつなげるということを目的として活動をしておりまして、現在120名弱、市内全域で緩く楽しくつながる活動をしております。中には川崎市外から、鎌倉、小田原のほうから高校生や大学生が、川崎で活動したいと参加してくれたりもしています。最初は私1人から始めた行動だったのですけれども、気がついたら120名まで広がっていただいたというところになっています。

引き続き団体のご紹介ですが、実は発起人と名乗っておりますけれども、代表とかを置いていない団体でして、上下関係を一切置いていない団体です。なので、私、今25歳で、今年で卒業する年ですけれども、高校生、大学生ともタメでお話をするという、フラットな人間関係を維持している団体になります。サークル活動とか部活動とは違って定例活動もなく、興味のあるイベントとか、興味のあるプロジェクトにだけ参加をしてもらえれば良いという第3の居場所的な機能を持って、目指している団体でもございます。

民間や行政の皆様ともすごく連携をさせていただきまして、既に100以上のいろいろな事業を市内全域で実施しております。全ては載せられなかったの、抜粋という形になるのですけれども、今日、富士通さん、先ほど「清走中」というイベントのご紹介がありましたけど、我々のメンバーもご協力をさせてもらったり、あと、今日、参加者の中にかわさき生活クラブさんもいらっしゃっておりますけれども、連携させていただいたりしております。

特に環境問題での取組というところでご紹介させていただきますが、今日、川崎市環境局さんにお招きいただいておりますが、環境局さんと一緒に絵本を我々で作成しました。若者会議がストーリーの構成やキャラクター、あと、もっとゲーム要素を入れたほうが良いのではないかみたいところを環境局さんと一緒に進めさせていただきまして、今、市内のいろいろな教育の場所で啓発に使っていただいていると聞いております。

また、川崎市の「大気・水環境計画」というちょっと堅苦しい行政の冊子があるのですけれども、こちらの表紙のデザインも実は若者会議のメンバーが担当させていただいて、美大に在籍している子が、少しでも行政の書類に対してのハードルを下げようという思惑から、緩い感じのデザインをさせてもらったりしております。

また、高津区、民間との連携ということでの紹介になりますが、一昨年、梶ヶ谷駅前通り振興会という商店街さんからご相談を受けまして、商店街のイベントが毎年同じ内容でやっているけれど、もうちょっと面白い要素を加えたいと、何か若者視点でないかということでご相談をいただきまして、我々若者会議で考えまして、梶ヶ谷という地理的な特性、農家が多かったり、あるいは水素ステーションができたりということで、環境が熱いということで、エコという要素を提案しまして、高津区役所、あるいは川崎市役所、地球温暖化防止推進センターにもご協力をいただき、水素カーや清掃車の展示、あるいは環境活動に取り組んでいらっしゃる団体、企業さんのブース等を出展させていただきました。

このような形で、我々、環境問題にも取り組んできているのですけれども、きっかけというところで

お話をしますと、我々、若者会議は、環境問題に取り組みたくてやっているというよりは楽しいことをやりたくて、それが結果的に環境問題だったというだけであって、やっぱり何事も楽しさというのは持続性を考えたときに大事だと思っていますので、引き続き今日いらっしゃっている皆さんと楽しいイベントを地域でやっていけたらと思っています。

市長：ありがとうございました。中野さん、もう卒業の年なんですか。

中野さん：そうです。

市長：後輩たちは大分育っていますね。

中野さん：はい、おかげさまで。ありがとうございます。

市長：最近、かわさき若者会議、いろいろなところでご一緒させていただくことが多いですけど、メンバーが120名もいるということで、やっぱり中野さんがおっしゃったように、何か楽しいよねと、楽しいかつ社会的に意味あるよねといったところにすごく人が集まっているという感覚があります。何かすごくすてきなグループができているということは、勇気づけられますし、環境から入っていくというよりも、結果環境につながったということですよ。

中野さん：はい、そうです。

市長：ありがとうございます。

高津区長、高津区との連携もありましたけど、少しコメントをもらってもいいですか。

鈴木区長：ちょっと視点が違うかもしれないですけど、さっきの梶ヶ谷のエルカジ、Lの形になっているのでエルカジ商店街さんというのですけれども、なかなか日頃お付き合いできなかったのが、こういったイベントを通じて、環境をきっかけにして、地域のエルカジさんとのお付き合いができるようになって、コロナになってなかなかイベントもできない中で、ぜひということで誘って、行ってみれば、若者会議の皆さんたちが実は仕掛け人でいてくださったということで、そういう意味でも感謝しています。どうもありがとうございます。

中野さん：ありがとうございます。

市長：やっぱり近い世代、同世代とか、近い世代のところだと話も入りやすいというか、そういうのはとてもあると思いますので、これからも活動を期待しています。

中野さん：こちらこそよろしくお願いします。

市長：それでは、教育委員会から山城さん、お願いします。

山城さん：総合教育センターカリキュラムセンターの山城と申します。

私自身のきっかけというよりは、私からは、先ほど市長からも子供たちはすごく意欲が高いというこ

とをおっしゃっていただいたのですけれども、子供たちの取組で、素晴らしい取組がいっぱいあるので、ぜひそれをこの場を借りてご紹介させていただきたいと思っております。

まず、この写真をご覧ください。左上から、Tシャツとか着なくなった服を使って再利用して作ったエコバッグです。真ん中が、まだ野菜、もう1回食べられるよという、再利用野菜のお知らせをするパンフレットです。それから、左下、これは子供たちが作った手作りのチョークです。小さくなったチョークを全部集めて作ったというチョークです。下の真ん中が、実はペットボトルキャップを細かく砕いたものを使ったアクセサリ作り。一番右下が、子供たちがGIGA端末という1人1台端末を使って作成したのですけれども、SDGsを学んだことを知らせるすごろく、フロンターレさんと協力させていただいてやりました。こんなものがあるんですけど、子供たちの取組から全て生まれたものです。小学生です。

どうしてこういう取組が生まれたのかということをご説明したいのですけれども、私が今担当しているのが総合的な学習の時間というものですけれども、この総合的な学習の時間がどういうものかというのをまずご説明したいと思います。ご覧いただいているのは、学習指導要領に示された総合的な学習の時間の目標になります。このように、自ら課題を見つけ、よりよく課題を解決し、自分の生き方を考えていくための資質・能力を育てる学習をしています。こうした学習を通して、これから先の未来で待っている未知の場面に出会ったときに、自分たちで課題を見つけて、粘り強く解決していくというような人材を育てていければと考えています。

次のとおりと示されているのが、この3つの柱です。実社会や実生活の中から課題を発見し、その解決に向けて必要な知識や技能を学び、自分たちで学ぶということです。他者と協働しながら取り組んでいく。こうした子供たちが、課題解決に向けて探求的に学ぶという学び方を身につけていく学習になります。

特徴的なのは、総合的な学習の時間の目指す資質・能力、それから、学習内容を各学校で定めることができるということが大きな特徴になると思います。学習指導要領の中には、このように環境問題に関わる探求課題の例というものが幾つか示されています。このほかにも防災だったり福祉だったり、そういったものが17の例が示されております。川崎市の各学校の取組としてはこのような取組があるのですけれども、本当はたくさんしゃべりたいのですけれども、時間の関係もありますので、今日は1つだけご紹介します。

これは川崎区の大島小学校の実践ですけれども、実は市長にもこの授業を見に来ていただいたんですけれども、大豆ミートを使った授業で、初め子供たちは、自分の生活から課題を見つけるときに、学校の給食の残量が多いのではないかとこのころで、まず課題を見つけたんです。給食の栄養士さんに聞いて調査をしたところ、思った以上に多かったわけです。これはまずいと、残量を減らしていかなきゃいけないというふうを考え始めたわけです。考えていく中で、それを減らしていくためにはどんなことが必要なかと情報を収集したり、整理分析をしたりしながら学習を進めていくわけですけれども、その中で、子供たちは残量を減らすということが実は環境に良いことだと気づいていくわけです。

先ほど市長からもお話があったように、SDGsのことをやっている学校はすごくいっぱいあるので、やっぱりこういうところにすぐ子供たちは気づくんですね。この環境をもっとよくしていくためにはどうしたらいいかというところで、講師の方から教えていただいた大豆ミートという環境に優しい食材があるということに気づいて、じゃあ、これを使っておいしい給食を自分たちで作ったら残量が減っていくのではないかと考えたわけです。最終的には、何と本当に給食のメニューを考えて、その給食のメニューが自校献立という各学校でやる自校の献立で出されたのです。ちゃんと作ったものを、それをみんなに食べてもらって、すごくうれしそうな顔をしていました。自分たちで考えたメニューが全校児童に食べてもらったわけですから。そこで、併せて、実は環境にこんな優しいものなんだよと、環境にこん

なに貢献するものだから残量を減らしてねという発表もしました。

このように、総合的な学習の時間では、子供たちが先生から教わるのではなくて、自分たちで行動していく、どうやったら解決していくかということを実行していくということを大事にしています。その中で、環境に取り組む専門家の方、先ほど地球温暖化推進活動センターの方ももちろんですけども、たくさんの専門家の方を招いてお話を聞くことで、より新しい知識が生まれたり、専門的な知識をもらったり、自分たちの活動が本物になったりするというようなところも取り組んでおります。

こういう学習を通して、子供たちが実際に行動を起こして取り組むということで、環境問題を自分のこととして捉えて行動を起こすという必要性を感じていく。そういうことが積み重なって、教えられたことをやるという子たちじゃなくて、自分から主体的にSDGsに関わっていくという子が育成されていくのではないかと考えています。

さらに、子供たちがこういう活動をする、おうちの人に話すんです。こんなことをしているんだよ、今、学校で、ということをしていくと、地域の方に発信するというのもあるんですけど、そういうことをやっていくことによって、地域の人たち、保護者の方たちの行動も変容していくということも期待できるのではないかと思います。

冒頭の写真ですけど、これ、実はエネルギー・環境子どもワークショップという、この前平間小学校で行われ、こういう発表する場というのもあって、川崎市は毎年行っています。3年ぶりに対面で今年ではできたんですけども、こういうことでいろいろな学校の実践を今度はまた自分たちのところに取り入れて、じゃあ、次はこんなことやってみようというふうに学びが広がっていくという活動も行っております。

このように、学びを発展的に繰り返しながら子供たちが探求的に活動に取り組んでいけるように、私たちからも、学校に日々授業づくりを大切にしようとお伝えをしているところです。

市長：やっぱり子供たちが自分で考えるきっかけをつくっているということだと思いますけれども、それぞれの学校ですばらしい取組があって、実は見える化ってすごく大事で、この前、川崎市子ども会議 カワサキ☆U18という会議をやったんですけども、そこでも給食の残食率が話題になりまして、子供たち、実はすごくよく見ていて、学校ごとにも残食率が違うし、学年ごと、クラスごとにも違うというのを結構子供たちは知っている。どのぐらい残食があるかと、自分のクラスは残っている、あつちはすごくみんな食べている、その違いは何かということまで分析されていてびっくりしました。それというのは、やっぱり先生とかいろいろな人たちが、このぐらい今残っているよとか、これってどういう意味なのだろうとか、食品ロスのことについてしっかり話していると、実は残食率がぐっと下がっているという話で、教育がいかに大事かと思いました。

子供たちはその解決方法を実はよく考えているということに、さらに僕はびっくりしたのですけれども、ぜひ教育委員会、これ教育ってすごく大事な柱だと思うので、引き続きこういうスパイラルアップをよろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございました。

市長：高津高校の若い、区長と同じ名前の鈴木さん、ゲストスピーカーの皆さんの話を聞いて、どんな感想を持ちましたか、ちょっと聞いてみていいですか。

鈴木さん：皆さん、すごくいろいろな活動をされていて、私たちも参加できそうなもの、協力できそうなものが多かったの、これはぜひやりたいなといういろいろ思ったのですが、やっぱり自分があまり外に出ないタイプといいますか、勉強、ゲーム、勉強、ゲームみたいな生活を送っているの、なかなかこういうことを知る機会がないんですよ。皆さんはどうですかね、知っているのかなと思うんですけど、こ

ういう発信をもっと自分が受け入れるように、周りに目を通したり、学校のポスターとかで、そういうところに目を通していけたら、何かもっと自分の生活もよくなるし、周りの社会も巻き込めるのかなと思って、ものすごくわくわくしております。

市長：ありがとうございます。素晴らしいコメントをいただきました。鈴木さんにコメントをもらってよかったなというか、わくわくしているというコメントが出ました。皆様の素晴らしい取組がもう変化を始めているということです。

5人のゲストスピーカーの皆さんで、ここをちょっと聞いてみたかったというのはありますか。1つ、2つだったら大丈夫かなという感じがしますけれども。

庄司さん：子供たちの学校給食の牛乳パックのリサイクルを進めたいと思って、今動き始めてやっていますけれども、なかなか広がっていかないという課題を抱えているんですが、何かいいお知恵があったら山城先生に教えていただきたいと思いました。

市長：山城さん、何かありますか。

山城さん：お答えになるか分からないんですけど、牛乳パックというところに限ってはいないんですけど、学校の取組の実践で実際にあったのが、身近なごみ、要はペットボトルだったり、牛乳パックもそうですけど、ごみになりそうなものだけど、実はごみじゃなくて、こんなふうに使えらるんだよというもので作品を作って、それを地域の方にご紹介して、だからこれは捨てるものじゃなくて、使えるものなんだよ、実は、というような取組をしている学校を僕は見に行ったことがあるので、何かそういうふうにより活用、再活用という新しい価値につながるというような授業ができるといいのかなと、今聞いていて思いました。

庄司さん：ありがとうございます。今やっているんですけど、そういう授業を。多くの方に伝えていって、今、燃やしちゃっているんですけど、リサイクルにつなげたいですね。

市長：そうですね。さっきのおむつの話にも似ているような話ですね。

庄司さん：そうですね。

市長：同じく牛乳パック絡みで言いますと、子供さんたちから牛乳パックのストローですね、プラスチックのストロー、あれは何とかならないものかというのは、たしか子供さんたちからの提案だったと記憶していますけれども、今、教育委員会のほうで、事業者の皆さんと調整をしている段階で、実現するのではないかと考えています。まさに、子供たちの素朴な、こういうプラスチックってどうなのという声が仕組みに変わっていくという、好事例の1つかと思います。ありがとうございました。

<STEP 2 市長との意見交換>

市長：今日は本当にいろいろな方に来ていただいています。企業の方、学生さん、地域でスポーツ指導していただいていたたり、あるいはPTAの方だったりという様々な方で、環境への取組をやっているか、やっていないかというのは関係なくお声がけさせていただいておりますけれども、ぜひこうやったらもっ

と、自分は今何にもしていないけれども、さっきの鈴木さんのように、あ、ちょっとわくわくしてきた、もっと情報を取るようにしようとか、あるいはもっと学校で貼り出すことによって、もっと巻き込めるんじゃないかというコメントをいただきましたけれども、皆様からも今、こんな活動をやっているとか、あるいはもっとこういう人たちと一緒にやりたいとか、そういうご意見がありましたら、ぜひみんなで共有していきたいと思うんですけれども。どなたからでも結構です。

あるいは、ホワイトボードって配られていますか。ホワイトボードにちょっとメモっていただいて、キーワードぐらいメモっていただくと、少し当てやすくなると思っていますので、挙手でも結構ですので、どなたかいらっしゃいませんか。どうぞ、佐野さん。

佐野さん：高津区に住んでいます佐野です。よろしくお願ひします。

今日、田邊さんの話がありましたように、やっぱり対話する場が大事ななと思っています、市民同士、本当にいろんな人たち同士が話す場があるといいと思いますし、企業の方とも話せる場があるといいなと思っています。ぜひ先行地域に選ばれた高津区で、また市民会議ができると良いと、切に願ひしております。

市長：ありがとうございます。話し合う場所、今日もその1つでありますけど、企業の方も参加いただいているということで、企業の方、手塚さん、何かコメントいただいてもいいですか。

手塚さん：高津区で事業を営んでおります手塚と申します。

改めていろんな学びをいただきまして、ゲストの方、ありがとうございます。実は台風19号罹災後、社内で我々も地球の温暖化とか取組をしようということで、エコワーケーションチームというのを会社の中に立ち上げて、3年間取り組んできております。環境経営目標なども立てている中で、幾つか質問も兼ねての部分もあるのですが、これだけ良い取組をいろいろされていることを私も初めて知った部分と知っている部分がありました。プラットフォームもいろんなものが立ち上がっていて、1つの何かポータルサイトじゃないんですけれども、ある程度こういうところに見に行くと、それぞれ民間、行政、あるいは地域住民の方々の取組の良い事例とか、継続的な何かアクションが見られるよ、みたいなのができてくると、行政の方にお願ひになるのか、個人的にはいいなと思っています。

2点目は、エコワーケーションチームの中からあったのが、やはり我々、環境経営目標を立てますと、CO₂、我々も2030年に30%削減というのを会社で設けておりまして、もう既に3年の中でプラスチックごみとかかなり削減ができて、詰め替え用に変えたりとか、ボールペン1つもそういうのに変えたりとか、いろいろ細かい取組は全部してきているんですけれども、その中でやっぱり最後大きなところってエネルギー調達だよねというところになっていまして、先ほども太陽光発電のお話がありましたし、国の政策の問題にも関わるとは思うんですけれども、ぜひ市としても、何かそういう再生エネルギー調達への導きの部分とか、サポートの部分とか、我々の自助力とうまくマッチするようなところ、そういったものを一気に、加速度的に進めていくことは、やっぱりCO₂削減の大きなポイントかと思っています。

もう1つはごみ分別。ごみの分別兼リサイクル、これはもう全国的にも小さい市町村では取り組まれていると思うんですけど、私も来る前にちょっと勉強してきたら、港区が高津区と同じ人口25万で、資源プラスチックリサイクルも始めていて、そういう取組をやっている大きな都市もあるんだということも感じましたので、ぜひいろいろと知見があれば教えていただいて、社内のエコワーケーションにも持って帰りたい、工業団体にも広げていきたいというふうに思っていますので、よろしくお願ひします。

市長：手塚さんのところは、本当に台風19号で大変な被災をされたというところでありまして、そのことからこういう自らの地球温暖化ということが、どう大気に影響していて、それを自分事として捉えて、いろんな経営改革の中でされているという、すばらしい取組をご紹介いただきました。ありがとうございます。

エネルギー調達のことと言えば、今年は私たちは地域エネルギー会社というのをつくって、小売だけでなく、電源開発までやっていくというのを将来的には市民、事業者の皆さんにも提供できるような、そんな枠組みをつくっていきたいと思っていますし、やはりその事業者の皆さんが自ら投資して、再生可能エネルギーという形で、太陽光も含めてなんですけれども、そういったところに投資をしていただくというのは、ぜひいろんな形、金融機関も含めて、サポートさせていただきたいというふうには思っております。

それから、環境局長から何かプラスでコメントがありましたら。

三田村環境局長：情報の共有というところ、本当にいろいろな団体、いろいろな個人の方がいろいろと取組をされているところを、市のホームページもありますし、あと脱炭素アクションみぞのくちではホームページがあります。それから、先ほどの富士通さんのアプリですね、その中でもいろいろな企業の取組を紹介しておりますので、そういったものにどんどん参加して発信して、そこはいろいろな興味のある方、ない方を含めて、そのサイトに入っていただければ、いろんな情報が見られる。自分もそれを見ながら、そういう取組に参加したり、自分の行動につなげたりと、そういう行動変容にすごく役立つアプリだと思っています。そういったものを広めていければと思っています。

市長：手塚さん、富士通のアプリ、ぜひダウンロードしていただければ、社員の方にもぜひよろしく願いいたします。

皆さん、ちょっとパネルを出して、書かれている方はどうぞ出していただいて。食べて脱炭素・・・、感動体験、ふるさと納税×川崎、面白い、エシカル、ちょっと何かすごく変わったところで、ふるさと納税と×川崎って書いてありますけど、ふるさと納税で大変悩んでいる都市でございますので。

小俣さん：先ほど市長がおっしゃられたように、川崎からふるさと納税というか、市県民税の流出が激しいというか、ナンバーワンです、たしか。先ほどもおっしゃられていたみたいに、市とかコンシューマーの人とか、各団体のサイクルという中で、例えば僕、正月に福岡の飯塚市にお節を納税したのですが、ちょっとこれって何なんだろうとすごいもやもやしていたんですけど、例えば市の中、行政の中ではいろんなボランティアとかアクションに対してのふるさと納税をしている団体もありまして、例えば、牛乳パックというのはバージンパルプというまだリサイクルがされていないパルプなんですけど、そういったものをリサイクルするシステムとか、そういったものに投資するとか。結構グリーンが溝口は少ないと思うんです。第三京浜とか、いろんな幹線道路はあるんですけど、そういったグリーンを充実させることでオフセットしていくというものに、皆さん投資しませんかみたいな感じで、そういうふるさと納税を、皆さん、全国の方、川崎にしてはどうでしょうかというのも仕組みとしては良いのかなと思っています。

市長：本当に小俣さんがおっしゃっていただいたように、肉や魚とかいうことではなくて、物じゃなくて、こういう事業とか、こういう政策をやるというところでふるさと納税の共感を得るというのを非常に重要な視点だと思っています。ありがとうございます。

田村さん：皆さん、石けんプラントってご存じでしょうか。きなりっこというリサイクルの粉石けんが、川崎にはあります。この石けんは、小学校の給食油を再利用して石けんに変えている石けんプラントが川崎区にあるのですけれども、そちらで作っていただいている洗剤になります。

私、子供が生まれて、洗剤を合成洗剤から普通の石けん洗剤に切り替えました。なぜなら、私、働いているので、少しでも節約というか、別で洗わないということをするにはどうすればよいかというところで、石けん洗剤で洗うところに行き着きました。

きなりっこはすごく循環、廃油を使って石けんをしているというところもよいですし、石けんプラントが始まった理由がすごく共感が持てたのでご紹介すると、多摩川に合成洗剤が泡だらけになって、多摩川の田園都市線が泡で跳ねて、窓が汚れたんですって、その時期。もう信じられないのですが、そういった合成洗剤のリスクを聞いて、じゃあ、もう本当に川崎にあるものを使うことが私にとって石けんの輪に入れる1つの貢献だなということで、私はきなりっこをすごく好きで、今愛用しています。

ですから、石けんプラントを皆さんにたくさん知ってもらって、きなりっこを使うのもいいと思いますし、さっき言ったふるさと納税で石けんを提供するというのも1つの選択肢かなと思ったりします。

市長：ありがとうございます。学校では使っていますよね、川崎市内の小学校、中学校では使っていますね。

田村さん：中学校は排水溝の問題で使えていないそうです。

市長：そうですか、小学校は使っている。

田村さん：小学校の個別の、センターじゃないところは使っているとお聞きしています。

廃油の回収所というのが地域にあると思うのですけれども。廃油を回収することで、回収油を回収している車が動く燃油になっているので、廃油を回収する場所というのが、私は宮前区民なので、宮前区はすごくあるんですけど、海のほうに行くにしたがって回収所が少ないとお聞きしていますので、そういったところも増やしていくと、エコの循環がすごく強くなって、川崎の良さがさらに最大限活用されると思っているので、私はこの石けんプラントをすごく一緒に活動したいという場所にご紹介させていただきます。

市長：ありがとうございました。いろんなものがリサイクルというか、サーキュラーになっている感じはしますね。

鈴木さん：こんにちは、鈴木と申します。

私、プレパークを開いて、子供たちの遊び場をつくっているのですけれども、庄司さんがおっしゃったように、身近な自然での感動体験というのが、心の中から湧き出るアクションにつながっていくんじゃないかと思っています。木登りをしたことで木のぬくもりを感じたり、木陰の涼しさを感じたり、川でオタマジャクシとか、魚とかを捕まえるということが感動体験になって、多摩川を守ろうという意識にもつながっていくんじゃないかと思うんです。

この集会に出る前、私はプレパークとこのムーブメントはそんなに関係ないか思っていたんですけど、いろんなお話を聞く中で、こうつながっていくんじゃないかとか、自分なりに腑に落ちていく部分があって、木を工作に使ったり、廃材を集めて工作に使ったりとか、お下がりバザーで子供服を集めて、子供たちの服の循環をつくったりということに取り組んでいるんですけど、そういうことが環境につながっていくというのを、プレパークに来ている子供たちにも伝えていくことで、子供たちの環境意識が

もっともっと高まっていくんじゃないかというのを、この集会に出て感じることができました。

市長：ありがとうございます。すばらしいコメントいただいて勇気が出ます。

庄司さん：私も本当にそう思います。そういう自然体験からいろいろな生活の中の問題というか、いろいろなことにつながっているという気づきが子供たちの多面的な、多様性を育むことにつながるとして、すばらしい活動していらっしゃると思いますね。頑張ってください。

市長：関わりがないかなと思ったけど、実は関わりがあったという発見が、実は私も原体験として、僕は小学校2年生からボーイスカウトをやっていたんですけども、実は多摩川の美化活動に参加したということが最初の環境を意識するきっかけだったんです。ああ、こんなにごみが落ちているのかというので、今ほどきれいじゃなかったの、そういう意味では、そんなにごみを捨てる人がいるんだというのがショックで、絶対にごみはここに捨てないとか、そういう意識が湧いたのは、実は多摩川からだったり、体験からという、頭で分かっているでも自分で体験するというのがいかに大切かと思えますね。ありがとうございます。

子供たちに深く関わっていただいておりますフロンターレさんはどうでしょうか。

黒木さん：川崎フロンターレの黒木でございます。

私たちの取組としてはいろいろやっているのですが、明日、等々力でホームゲームがあるんですけども、環境の配慮した食器を今シーズンから積極的に取り入れるというところと、あとフードドライブをやっていて、これはファン、サポーターの人から食材を支援していただくという形で、毎試合やっているんですけども、こちらが毎試合毎試合増えていまして、大体1試合当たり100食ぐらい増えてきています。

僕らの発信力というところは、このムーブメントにすごく引かかりますし、それ以外にも先ほどの山城さんもSDGsすごろくという小学校向けの授業で、例えばこの脱炭素というところで、大人にそのことを伝えるよりも子供に伝えることで、その保護者、兄弟と、1人の大人に伝えるよりも子供に伝えると3人、4人、5人と広がっていくという力は、すごく子供、若い世代の発信力をうまく生かしながらやっていければと思っております。

市長：ありがとうございます。そういう意味ではフロンターレさんと教育委員会、学校でつながって、SDGsすごろくができて、それが普及していくという、すごいよいきっかけをつくってくれていますし、環境に配慮した食器を提供していくというのは、やっぱりフロンターレってJリーグの中でも、特にこういうムーブメントを巻き込む力のあるチームだと思っております。

これからもぜひ、誰か今日、もっと一緒に何かしたいなという人がいますか。

黒木さん：ぜひよろしく申し上げます。

市長：ぜひフロンターレと何か一緒にやりたいという方、かなり気持ちはオープンですものね。

市長：前川さんは、地域の力、再結集、コメントをいただけますか。

前川さん：子供会や子ども会議をやっている前川といます。

子供会の役員をやっている、子供たち、子供会の加入者がすごく減っている、やっぱり地域の力が弱くなっているというのを感じます。地域教育会議も参加をされていて、もうメンバーが全然変わらない、僕は小学生、中学生とずっとお世話になっていますけど、委員の方、誰1人変わっていないみたいなことがあって、何かどンドンどンドン地域の力が落ちていっているときに、今日の話で言うと、環境という1つの目的をみんなで共有することで、その目的を達成していこうということで、多分みんなが結集しているということを考えると、地域の力をもう1回再結集できる力を、この環境の問題を取り組むことが持っているんじゃないかと思って、早速子供会で何か取り組めないかと、今考えているところです。

市長：ありがとうございます。

市長の主導って書いてありますけど、どうぞ。

柳下さん：さっきちょっと名前が出た柳下です。

田邊さんの発表の仲間ではあるんですけども、市民提案を出して、もちろん市役所で市長さんをはじめに、少しでもよい影響があったらうれしいと思うんですけども、実は川崎以外にも結構影響がありまして、川崎でやったような市民会議を来年やろうというところが、私の知っている限りで10か所もあるんです。そのうちの半分ぐらいは首長さんのトップダウンなんです。要するに、脱炭素をやるのだったら、今までの延長線で計画をつくってパブコメをやって、あとは役所が管理して、またパブコメをやって計画をして、そんなのでは駄目だと。市民がずっと参加できるような、そういう仕組みに変えろというトップダウンだよ。それで気がついて、川崎で、おたくでやったんですねというので、あちこちから問合せがくるわけです。

それが1つと、もう1個はすごく影響を受けたのが東急です。77の提案を見たら、頭が痛いことが半分だけど、半分はビジネスチャンスをもらいましたと、そういう反応なんです。だから東急として、例えば田園都市線沿線なんていうのは、自分たちで造ってきて50年たっている。みんなが年寄りになったし、それで町全体もいろいろと陳腐化しているところもあるし、共通の問題として脱炭素をどうするかというのは、一川崎とか何々区じゃなくて、沿線全体でどうするかというのが絶対に重要だと。

こんなことで、今までとちょっと違った動きがありますので、どうしても役所というのはやっぱり法律だったりいろいろとあって、そういう流れでやるところを市長さんのような民主主義の下で何かやっしていこうという発想を持っている政治家が、ぜひこういう大きな転換期に力を発揮していただきたいというのは本当にお願いです。

市長：頑張りますという形ですけども、ありがとうございます。でも、本当に市民からの提案というのは非常に、先ほどの田邊さんの話、今まで全く関係ない無作為の人たちが熟議することによってこうなるということが、田邊さんは一例だと思いますけれども、こういうドミノを起こしていく必要があると思います。

さっき、プラスチック循環の話、たしか手塚さんからも出ましたし、前川さんからも何か一緒に再結集で取り組むというのは、実はこういうリサイクルみたいなものは、まさに地域の住民の力ですよ。川崎が、これだけ政令市で1人当たりのごみ最小になったというのは、まさに市民力ですよ。ですから、今度は脱炭素のところでもう1回市民力を再結集させるという、よいキーワードをいただきました。ありがとうございます。

地域で活動されている加藤さんや佐藤さんのSELF、スポーツセンターで何かできること、何ができるでしょうか。

佐藤さん：佐藤と申します、よろしくお願いいたします。

今回、お誘いをいただきまして、ここに参加したことによって、皆さんの活動がものすごくやられているというのを、何か本当に恥ずかしいんですけども、初めて知りました。いろいろなところで自分ができることって、何かエコバッグにしたり、小さいことは各家庭でできていると思うんですけども、やっぱり大がかりなことになると、誰かと一緒に、どこかの企業と一緒にとか、何かよいアイデアがないとできなかつたりもしますよね。

子供たちもいっぱい来てくれるし、年配の方もたくさん集ってきてくれるスポーツセンターだと私は自負しております。その中で、SDGsの子供の研修だとか、そういうこともやりました。2019年には水害に遭ったときの避難所にもなりました。そういった中で、地域の人たちがものすごく手伝ってくれるということも経験しました。

そんな中で、私たちが集まる中で、何かできないのかなということ、今、何ができるんだろうということしか頭にないんですけども、何かそういう中で1つアクションを起こしていればいいのかと思っています。いろいろなところでお声をかけてくださる方がいれば、何か協力して、何がやっていきたくないかな、そこが本当に何か勉強不足で、じゃあ、スポーツセンターで何ができるんだろうというところを教えていただきたいという感じです。

市長：ありがとうございます。

高津区長から、鈴木さん、お願いします。

鈴木区長：佐藤さんも加藤さんも発信力も実現力も持っていらっしゃる方で、実は、今話にありましたけど、もともと避難所ではあるんですけども、初めて体験するような東日本台風のときにペットを連れてくる方がいらっしゃる、そのルールもまだ確立されていなかったというときに、臨機応変に対応してもらったということもありますし、まさに佐藤さんのご自宅も水害に遭って、そこにみんなが駆けつけて泥をかき出す、これはやっぱり日頃からの信頼関係だと思いますが、そのスポーツセンターだけじゃなくて、高津中学校、久本小学校も含めて、地域で管理をしてスポーツを振興させようとやっていますので、この発信力と実現力が、今日、ほかの方たちもいろいろ発信していらっしゃいますけど、それこそうまく合わされば、化学反動的にもう何でも発信ができる、実現力があると感じています。

ぜひ今日をきっかけにしてつながってもらえれば、何でもいけるんじゃないですかね。とても期待しています。ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。本当にSELFの皆さんはすごくあれだけ人が、老若男女が集まってくるところってなかなかない、それはものすごい価値だと思うんですよね。体を動かそう、スポーツしようという健康づくりをやっていこうという人たちは、非常に、まさに意識の高い方たちがこの環境問題にコラボすると、すごく影響力を増すのではないかと思います。

多分いろんなメニューが出てきそうですね。例えば、さっきの「清走中」の話もそうですけど、歩きながらスポーツごみ拾いみたいなのも悪くないし、そこから終わったら何かをやるとか。

佐藤さん：ごめんなさい、さっきのチラシを見せていただいて、え、これって何と思ったんですけど、何かそれを発信する力が私にはちょっとなくて、たまたま何か19日という設定だったんですけど、何が私たちに協力できるのかなというところで、その辺のごみが落ちているところをみんなで行ったらいいのかな、散歩じゃない、スポーツですという感じでやったらいいのかなと思いました。

市長：発信力という意味では、池田さん、あのサイトは使えますよね、相当。コメントいただいているか。

池田さん：市長にも以前コメントをいただいたんですけども、我々のアプリって企業もそうですし、市民の方も乗りやすい仕組みになっているよねというコメントをいただいています、まさに佐藤さんの取組を我々のあのアプリの中で発信していただくと、あのアプリって、まずは環境意識の高い人たちをまずターゲットにしている、そういった方々に届けることはまずはできると思いますし、我々の思惑としては環境意識の高い人が入ってきてくださって、その同調効果によって、無意識層も取り込んでいって、1つ大きなコミュニティーをつかっていきたいと思っていますので、そういうところでも発信していただくと、我々もつくったかいがあると思います。ありがとうございます。

市長：そうですね。ですから、SELFさんで例えばやられるようなイベントみたいなのも、こういう環境の観点があって、こういう取組がありますとそこのサイトに流していくと、自らわざわざ発信しなくても、勝手にどんどん発信されていくという形になるので、そういう意味では非常にいいプラットフォームをつくっていただいていると思います。
どうでしょう、田中さん。

田中さん：今、高津高校の私たちも、生徒会を中心にして清掃活動を今やっています、そういうところでは池田さんがおっしゃっていた「清走中」とかを一緒に富士通さんと協力して、同じような共同プロジェクトを行えたらよいとも思っていて、私たちは地域も含めてそういう清掃活動をしていきたいと考えているんです。そういうところで地域の人を集める何かポイントだったり、池田さんに聞けたら思っています、人を集めるというところは何かあったりするんですか。

池田さん：そうですね、それはフロンターレに聞いてもらったらよいかもしれませんが、私たち自身、富士通は市民接点とかがすごく弱かったです。今回、まちづくりをやらせていただくとなったときに、結構苦労してきた部分があります。大事なのは、アプリケーションをまずつくって、市民に何かしらアプローチをしていくということと、使っていただいた方をちゃんとリサーチして、その人たちがなぜ使っていたのかということと、ちゃんとアプローチしていったということが、我々にとって1個気づきかと思っていて、どうやって人を集めるかということ、まずは市民の方と寄り添って、どういうことに課題意識を持たれているのかということから、我々が何をつくっていけばよいかを考えたということですかね。

市長：中野さん、人を集めているのが結構うまいですね。コメントいただいているか。

中野さん：ありがとうございます。話がかわっちゃうんですけど、私、多分、田中さんと一緒にごみ拾いしたことがあります。

市長：そうなんですか。

田中さん：はい。

中野さん：今そこに座っている佐野君という、彼がリーダーをやっているごみ拾いの団体に、実は彼に以前

来てもらったことがあって。

田中さん：実は、はい。先月一緒に参加させていただいて。

中野さん：すごく積極的に現場に入ってきているなど。

市長：中野さんと田中さんと佐野さんがごみ拾い仲間。

中野さん：彼がやっているごみ拾いの団体に多分来てくれたことがありますね。

田中さん：機会が合わなくて、佐野さんとは多分対面したことがなかったんですけど、先月この高津区で活動している清掃活動に、ちょうど鈴木先輩とかと一緒に活動に参加させていただいて。

市長：佐野さんの活動団体というのは。

佐野さん：全国にあるグリーンバードの溝口で手伝いをさせていただいてまして、それで先月は、僕は今高3で、共通テストがちょうどその日にあったもので、ちょっと参加ができなかったんですが。

市長：グリーンバードの取組ってご存じの方、手挙げてもらっていいですか。結構やっぱり知られていますね。知られていない方もいるので、ほんの少しだけグリーンバードの活動を教えてもらっていいですか。

佐野さん：グリーンバードは全国、とてもたくさんあって、東京で言うと新宿、渋谷、池袋とかに結構あって、川崎市内で言うと、溝口もそうですし、専修大学の学生さんたちが生田でやっていたりですとか、あと川崎でもやっています。

市長：そうですね、川崎でも小杉でもありますね。

佐野さん：はい。いろんな企業さんに協賛いただいてやっている、一般市民がやっているごみ拾い団体でして、各団体によって違うんですけど、毎月決められた日に月に1回であったり、週に1回であったり、いろいろあるんですけど、地域のごみ拾いをするのが目的の団体です。

市長：いろんなところでつながるものですね。ありがとうございます。

中野さん：人を集めるところを答えられていなかったですけど、グリーンバードもそうですし、我々若者会議もそうなんですけど、一番参加してくださる方、圧倒的に口コミが実は多くて、我々大して発信をそこまでしていないんですけど、楽しんでくれたメンバーが周りの友達を連れてきてくれたり、そういうところで口コミが一番広がっているんで、私がどうこうというよりは、口コミで皆さん楽しんでくださって広がったということだと思います。ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。池田さん、お願いします。

池田さん：田中さん、「清走中」の人集めのところで苦労した点があったので。告知してから最初の1週間は本当に人が集まらなくて、50人、60人ぐらいの応募だったんですよ。200名の募集だったんですけど、最終的には400名になったと。何をやったかという、一気に伸びたのは、環境局の皆さんに協力いただいて、小学生にビラを配らせていただいて。それで一気に伸びたので、やっぱり学生とか若者というのは、結構重要なのかなと気づいたので。

市長：ありがとうございます。並木さん、いいですか。

並木さん：こんなことがあったらいいなというより、どうしたらいいんだろうなと思って考えたことがあって、今日いろいろな取組が紹介されて、すごくどれもよいと思って聞いていたんですけど、ただ、そういったものがあったらまあ、そういうものにちょっと気が進まなくて参加しないとか、そもそもあまりいろいろイベントに参加すること自体が苦手な人だったり、単純に乗り気じゃないとか、関心がないままの人というのが必ずいると思っていて、何かそういった層にも行動変容を引き起こしていかないと、目標は達成できないと思うんですね。

この辺りをどうしたらいいのかなというのをすごい難しい問題だと思って、もちろん教育の点とか、関心を持つ可能性がある人たちに向けてイベントをやるとい、今日紹介されたような取組はどんどんやっていって、ポジティブに関心を持つ人を増やしていくというのは大事と思うんですけど、やっぱり、こうしたほうが環境によいみたいな、よいというところでは動けない人がすごくたくさん、もうおおむねそうだと思っていて、だからどこかでよいからやろうというところじゃなくて、それが何か例えば便利とか、そのほうがお得だったり、ちょっと俗っぽいんですけど、そのほうが自分の利益になるというふうな生活の中で思えるようなアプローチがどこかで出てくると、さっき出た無関心な層というか、今、関心のない層も一気に取り込めるのかなと、ただそれってどうすればいいんだろうとすごく思いました。

市長：並木さんの本質的なお話で、地球温暖化が確実に進んで危機感を持っている人たちって川崎市のアンケートでも9割ぐらいいらっしゃるんですけども、実際に具体的に取組もうとしている人たちというのは割合がぐっと下がってくると。まさに並木さんの感心層、危機感を持っているんだけど、だけどそこからのもう1歩といったところに、実は本当に今日、アプローチしていきたいところなんですよ。ありがとうございます。

ちなみに、今、現時点で環境にこれといった活動はあまりしていないという方がいらっしゃいましたら、ちょっとお話を聞いてみませんか。今日のお話を聞いて、どうやったらちょっと関心が湧くとか、あるいは行動につながる、活動につながるというのを齋藤さんからお話いただけますか。齋藤さんの後、山崎さん、お願いできますか。

齋藤さん：実際のところ、こういう活動をしているというのをほとんど知りませんでした。テレビでニュースとか見ると、温暖化で森林が焼けたりしているから、ああ、やっぱり大事だなと思ったりしていたんですけど、今日いろいろお伺いして、こんなに活動しているんだと思ったので、少しは何かやっぱり活動したほうがよいのかなと私自身思いました。

市長：ありがとうございます。

山崎さん：一応、ペットボトルは、ここに引っ越してくる前は世田谷だったので、ペットボトルとかそうい

うのは全部、瓶とか缶とかはやっていたのですが、ここへ来たら、初め全部一緒にいいですよと言われてちやって、え、いいんですか、でも・・・と思いながら、でも一応毎週出しているんですけど、でも私は出すのは面倒くさいから、ビニールのごみ袋がいっぱいになるまでためて、という捨て方をしているので、ペットボトルは出しますが、蓋がお店とかそういうところがちょっと少ないので、それをどうにかしてほしいというのがあって、いつもどこに持っていこうと、悩んでおります。

市長：ありがとうございます。

今、川崎市でプラスチックは100%市内で循環させようという取組を始めているんですけども、最初はペットボトルからというところで、水平リサイクルというものを昨年からやり始めて、事業者の皆さんにも大分ご協力をいただいています。

例えばJR南武線の駅、あそこに出ているペットボトルは、全部市内のところに持っていかれて循環するようになっていきますし、令和6年からは全てのプラスチックを一括回収としてまいります。

環境局長から少し補足してもらっていいですか。

三田村環境局長：ペットボトルについては今、分別していただいて、それとその他のプラスチックという形になっていますが、そのプラスチックは容器包装というリサイクルのマークがついているものだけを川崎市では今、プラスチックとして集めています。令和6年度から段階的に全ての製品プラスチック、おもちやであっても、あとはいろいろ、くしとか歯ブラシとかそういったものもリサイクルに回すような仕組みを始めたいと思っています。川崎市には、先ほどごみの1人当たりの出すのは政令指定都市で一番少ないとありましたが、プラスチックの分別率は40%ということで、まだ他都市に比べると、まだまだ分別の伸び代があるというのが現状です。それをどんどん高めていきたいと思っています。

市長：ありがとうございます。

三田村環境局長：プラスチックの原料、ペットボトルはペットボトルにしますね。プラスチックは高炉の還元剤とか、それから燃料になったり、そういったものにもできます。質のいいものについては、プラスチックのバージン材ということで、プラスチックの植木鉢とか、あとはいろいろ選挙のときのボードとか。

市長：掲示板、ありますよね。ああいうプラボードっぽい、ああいうものに生まれ変わったりしているんです。

三田村環境局長：ああいうものになるというリサイクルの仕組みはできています。

市長：そうなんです。今まだ4割で、6割はまだ余力があるというか、伸び代があるんですね。ここに挑戦しないと、実は川崎市、市内で民生系では最大のCO₂排出事業者なんですけど、どこが多いかと思ったら、やっぱり焼却炉なんです。焼却炉でプラスチックを燃やすことでCO₂を出しているんで、実はこの6割を削減すると劇的にCO₂を削減できるということになるので、さらにこの仕組みを、リサイクルに回していく取組を、これ、本当にごみを減らしたと同じように市民の皆さんの意識を高めて行動に変えていくということをしつかりやっていきたいと思っておりますし、ぜひご協力もいただきたいと思っています。

岡安さん：この脱炭素みぞのくちの本の中に、ごみを利用して発電しますとあります。これは今、橘のほうでということですが、実はごみコンポストというのを個人的にやっていて、そういうのをやっている人もいっぱいいるので、今度それをもっと広げようかというお話もしているところなんですけど、個人でやるには、ちょっとハードルが高いというところがありまして、本当に毎日できるよという人しかなか手も挙げてくれないんですね。今、これからそれをどうやって増やそうと考えているんですけど、このごみ処理の電気を発電できるという処理施設を、私は多摩区に住んでいるんですけど、多摩区とかそういういろんなところでもっともっと造っていただくというのは将来的にあるんですか。

市長：それは焼却炉をですか。

岡安さん：焼却炉で発電ができるという。

市長：説明させていただいてよろしいですか。

岡安さん：お願いします。

市長：今年、高津区にある橘処理センターというのがリニューアルします。もともとあったものを一時期止めていて、それをリニューアルして、ここは今まで使っていた炉の約5倍の発電量を有する非常に高効率な炉に替えます。これ、順々に改修していくということを繰り返していくので、処理場自体は増えません。今、4つ処理場がある中の3つを動かしていて、1つは改修するという、こういうサイクルになっているので、処理場自体はこれからも増えることはありません。

それからコンポストの話ですけれども、やっぱり焼却するときに邪魔と言ったらあれなんですけれども、温度を下げちゃうという意味では、生ごみというのは大敵なんですよね。炉の温度を下げちゃうということなので、生ごみをまず、水切りはもちろんですけれども、できればコンポストみたいなのをやっていただいて、生ごみはなるべく出さないというのが本当はいいんですよ。

なので、おっしゃったように段ボールを作って、例えば自分のアパートのベランダでというのは結構ハードルが高かったりするんですけど、最近、去年の取組ですけど、環境局だったかな、やってもらったのはバッグ式の、ちょっと紹介してもらってもいいですか。

三田村環境局長：非常におしゃれな買物バッグみたいなものをコンポストにして、それで生ごみを自宅で減量化というか、堆肥にさせていただいて、その堆肥を地域の農家さんで受け入れてもらうご協力を得て、そこに持って行っていただく。そういったモデルを武蔵小杉のタワーマンションの方々とか、東急の屋上を使って、そのコンポストを、堆肥を持って行って、そこで野菜を栽培するみたいなモデル事業をやりまして、そういったことで、まずはごみを燃やすと電気になるんですけど、やはりごみは出さないというのが一番なので、ごみの減量化、ごみになるようなものは使わないとか、ごみを出さないようにいろいろ食事とかをしていただく、いろいろな工夫でやっていただくというのは非常に重要なことだと思っています。

市長：ありがとうございます。並木さんから先ほどお話があったように、今やっていない、ちょっとあまりどうなのかなと思っている人たちに、はっきり言ってどこから刺さるか分からないというか、ごみのリサイクル、廃棄物のリサイクルで、あっと思う方もいらっしゃるし、本当に先ほどのごみ拾いから始めようという方もいらっしゃるし、多摩川のことから始まる方も、ある意味でものすごく多チャンネルじ

やないと、どの人にどこから刺さるかは本当に分からないので、いろんなメニューが、こんなのあるんですということを広く皆さんに知ってもらうことがすごく大切だと思うし、そこをもう少し、もう一押し背中を押すような行動がみんなで見ればすごくいいなど。だから、今日、まだ具体的にしていよいよというふうな、さっき高津高校のみんなも手が挙がりましたけれども、今日、知ったことでちょっと何かやれるかなと思うようなのって出てきましたか、どうですか。

園田さん：何か具体的に思いついたということじゃないんですけど、高津高校内でも例えばごみの分別とかも、キャップとか瓶とかもちゃんと分けていますし、生徒会室でもそういうのをやっているの、何かこれから高校で一丸となってやっていけるような取組を探していきたいと思いました。

市長：ありがとうございます。1人でやるよりも学校全体でやるって、強いよね。それが全市的に展開されると、これは大きいですね。

福本さん：食べる脱炭素というキーワードでお話しさせていただきたくて、最終着地点は有機給食ですけども、今回、溝口は全国13か所のうちの都市部のモデルになったらいいなといったときに、川崎市の強みって消費力だと思うんですね、人数がたくさんいて。ほかの地域で有機給食化をやっているところの話聞いて、うち有機給食実現しました、でも子供が実は3,000人と聞いたとき、川崎市って毎日10万食ですよ。10万って、もう規模が全然違うんですね。

あと今日、皆さんのお話を聞いていて、やっぱり子供って大事、これからの未来をつかっていく子供を元気に育てる、私の活動の原点はただ子供をとにかく元気に育てたいということだったんですけど、子供たちが大事ということと、あと楽しいというキーワードがあったと思うんですけど、やっぱり人って幸せになれる瞬間、楽しいというところに集まってくると思うんですけど、同じくおいしいというところにも人っていっぱい集まってくると思うんですね。

だから、食べる力って、川崎市はすごくあって、二子玉よりも武蔵小杉よりもたまプラよりも溝口に住む方って、住んでみてすごく居心地がいいから住み続ける方が多いらしいんですけど、皆さん、よく夜になると行かれる飲食店、そういうところに魅力を感じているという話もよく聞くんですね。なので、食べる力で脱炭素化していきたいと思ったときに、やっぱり畑、食べ物から出る炭素って多いので、しかもそれが今、ただ出すCO₂を減らすんじゃなくて、今、空中にあるCO₂さえ吸収してしまっ、環境をもっとよくする農業の方法もあるので、そういうものを川崎市民がみんなおいしく食べて応援する仕組みがあったらいいなと、食べる脱炭素という感じで。

かつ、関心がない人も巻き込みたいといったときに、行政とみんなで力になるというと、やっぱり学校給食という力はすごく大きいというお話をいろんなところから聞いていて、特に市長、中学校給食を実現していただいた、市長、福田さんのところで、10万人の子供たちが毎日健康でおいしくて、かつ脱炭素に食べることで応援する仕組みができたらいと思っています。

コンポストの給食の残飯のお話もありましたけど、それで畑をよくするというそこもつながることもできますし、何か食べる力を都市である特徴を生かしてできたらいいと思っています。

市長：食の話でいくと、食べる脱炭素って面白い、非常にキャッチーな言葉ですね。

給食で地産地消のここの高津区でいうと、久末地区が非常に農業が盛んな地域で、この前も高津区内の中学校に行ってきましたけれども、久末の野菜を食べたことあるといたら、ないと言っていたので、ぜひ食べてみてという話をしたんですね。すばらしい野菜がこの川崎に、高津区にあるからという話で、まだそのところがうまくつながっていないのが、ちょっとまだ働きかけが足りないのかなと思っています。

ますけど、実は市内の農家さんをお願いして、市内の食品、農産物をできるだけ提供してくださいというお願いをさせていただいて、毎年その量は増やしていっています。

ただ、なかなかこれだけの食数を一気にこの時期にと、計画的につくるというのは、それは農家さんにとってもものすごく負担になるので、ここはうまくコミュニケーションをしながらそういう機会を提供していく、そして食育が栄養だけじゃなくて、環境にも大切なんだということが、地産地消というのがどれだけ脱炭素につながるのかという、こういう教育もまさに教育委員会でもよいプログラムをつかって、かつ給食でもというような形でやると、まさに体験しながら、あ、こういうことかというのが分かると思いますので、そんなところにも力を入れていきたいと思います。ありがとうございます。

確かに飲食店でももう少しそういうこと、一緒に取り組めると脱炭素みぞのくちの溝口の飲食店なんかを巻き込めると最高ですよ。

どうぞ、エシカル消費って書いてありますね。

徳野さん：私は今、食べる脱炭素、食べて脱炭素かな、とてもいいと思いました。私がキーワードとして上げましたのは、エシカル消費です。エシカル消費って、ちょっと耳慣れない言葉かもしれないんですけども、例えばサステナブルファッションだとか、今、市長がおっしゃった地産地消だとか、それからフェアトレードだとか、そしてプラスチックをできるだけ少なくする買物をするだとか、いろいろな要素が含まれています。今、脱炭素アクションみぞのくちで、プラスチックを少なくしようというプロジェクトに参加していたんですけども、溝口の飲食店、たくさんありますよね。そのたくさんある飲食店で、コロナのときにとてもテイクアウトが多くなって、プラスチック容器の使用が増えたと聞いています。そういうものを少なくするために、溝口の商店街、飲食店の人たちが協力したりしたら、すばらしい発信力になると思いますし、消費者として、私たちが活動とは言わなくても、行動変容としてできることと思います。名古屋はフェアトレードタウンと言っていますけれども、川崎市がぜひエシカル消費シティになるとよいと思いました。

市長：ありがとうございます。ぜひそういう高津区、溝口周辺の飲食店なんかを巻き込んで、それが消費者の、先ほどの力で変えていけるとすばらしくよいですよ。そういう仕組みづくりも、ぜひ脱炭素みぞのくちアクションの協議会のメンバーでも、さらに議論を深めていただければうれしいと思います。

石原さん：関心がない方々というところに注目をしたんですけども、今、若い人たちというのはInstagramやユーチューブやティックトックというものをよくご覧になるんですけど、短くて、堅苦しいというのはあれですけど、みんなが面白く見られるような分かりやすい動画をつかって、広めることによって、さらに若い層などいろんな人に知ってもらえるかなという意見ですね。

市長：ありがとうございます。伝える手段ですよ。

石橋さん：自分はここに来るまで一切知らずに来たもので、話を伺って、やっぱり知らないということもそうですし、こういう活動をしていることを知らないということであったり、危機感の低さが正直あったと話を聞いていて思いました。

どうしてそうってしまったかというところで、情報が入ってこないというところがすごく大きいと思いました。今、石原のほうから話があったように、ユーチューブだったり、ティックトックだったり、そういうので発信してみたりというのも面白いと思いました。

市長：ありがとうございます。まさに石橋さんのように今まで全然思っていなかったという方、今日来ていただいて本当によかったと、最高の、やっぱりコメントいただきたい方なんですよね。同じような思いをしている人たちに、伝え方という、SNSの話はありますけれども、今日参加してみて、自分と同じような人にどうやってあげたいとか、どうしたら伝わる、SNS以外で、何かそういうものってアイデアはないですか。

石橋さん：パツとは思いつかなかったんですけれども、やっぱり狭いコミュニティでリアルに話し合える人たち、会社内であれば、自分から発信することは可能だと思うので、まずそのきっかけをどこでつくるかというところが重要なと思いました。

市長：なるほど。ありがとうございます。そういう意味では、所属している、今、会社って話が出ましたけれども、今の例えば石橋さんが一番接点を持っているところという、会社ということが大きいですか、要素として。

石橋さん：そうですね、まずは会社から、自社の中でそういう話ができたら、その後はもう周りの企業とかにもPRするということはできるのかなと思います。

市長：ありがとうございます。

企業の方、ちょっと手を挙げていただいてもいいですか。企業の方で、五十嵐さん、ちょっとコメントいただいていいですか。今の会社というか、社員の皆さんとか、コミュニティとの接点ということからはなかなか難しい現役の働いている人たちは、会社の力って大きいと思うんですけれども、いかがでしょうか。

五十嵐さん：会社のコミュニティももちろんそうですし、僕、今日、皆さんのいろいろなお話をお聞きして、1つ謝らなきゃいけないなと思って、今日、すみません、先ほどペットボトルを買ってしまいました。非常に反省したいと思います。

実は我々、ものづくりの企業なので、ものづくりしかできないですけれども、実は残飯処理機だったり、EVの充電器とか、その辺りをいろいろ扱い、開発をしているんです。それと社内的にはソーラー発電、実際に入れて我々工業会内も連携して、災害時にも一般の方が携帯を充電できるぐらいのネットワークを使えないとか、今までお客さんが来たらペットボトルを出していたのを紙コップに変えるとか、いろいろそういう取組をしているんですけれども、我々、企業側もこの取組が本当にいいのかどうかというところを悩んでいて、もし可能であれば、若い方たちに駄目出しをしていただきたい。

我々はこんな取組をしています、これ、良いと思いますか、もしくはもっと良い方法ありますか。もし良いと思う取組があれば、SNSで少し発信をしていただいて、企業側も発信していただければ若い方がまた入ってきていただけるという好循環ができるのではないかと思います。

そういう関連のいろいろのことができた上で、社内、社外と色々な方が来て、実は、弊社に紫外線発生器をコロナ対策で置いておいたんですけれども、いろいろな方が来て、そういうものもPRさせていただくと、やっぱりそこから話、先ほど人を集めるのは口づてというお話で、僕もそのとおりでなと思っていて、ものづくり、よいものを作って口づてでいくものがやっぱり一番ヒット商品になるかなと。その口づてという意味では、やっぱり会社、もしくは会のネットワークというのは非常に有効ではないかなと。

ただ、我々もCO₂削減どうすればよいのかというのが正直なかなか分からないところも、個人でい

うとあるので、その辺りがもう少し分かるような、例えばこれは本当にどのぐらい削減しているのか、ストローを紙にしたらどれぐらい削減できるのか、先ほど市長が言っていたコーヒーはどのぐらいのものを使っているのか、その辺りが分かりやすいものをSNSで発信していただいて、それをみんなで見られるような、そういう環境づくりをすれば、我々も、あ、こっちよりこっちのほうが良いんだなということ、具体的に取組ができるかなと思います。

市長：ありがとうございます。

湯川さん：さっき石けんプラントの話があったんですけど、多摩川が泡だらけだったというのは、50年ぐらい前なんですけど、私、その頃に生まれた人間なので、環境のことにすごく関心があるんですけども、この川崎市民から始まった石けんというのが、さっきの石けんプラントの話で、電気のほうは原発ゼロ市民共同かわさき発電所というのがあるんですけど、再生エネルギーの、これをつくったのが川崎市民というのが、私はすごく自慢だなと思っていて、ここにいらっしゃる方も市民の方がいらっしゃると思うんですけど、皆さんにも自慢していただきたいなということの1つです。

結構知らない方がたくさんいらっしゃって、知っているだけじゃなくて、自分のアクションとして、そこに賛同するということが大事で、私は小学校2年生の子供がいるんですけども、やっぱりそういう活動を親がしていると、子供は自然とそういった環境の中ですごく発信力がありまして、川崎のかわるん君が大好きでマスコットをつけていたり、みんなにかわるんを知らないのとかアピールしていたり、何かやっぱり子供を巻き込むということも大事ですけど、親の背中を子供は一番見ているので、大人が変わることが1番なのかなということをお伝えしたいと思って来ました。皆さんも自慢してください、ぜひ。

市長：ありがとうございます。今ちょうど、議会のほうにも条例改正の提案をしておりますけれども、太陽光発電装置の設置の義務化という形で取り組んでいこうと、再生可能エネルギーをつくり出す場所にもなっていかなくちゃいけないと考えています。ぜひ、市民の皆さんの理解を得ながら進めていきたいと思っています。ありがとうございます。

ゲストスピーカーの皆さんから、一言ずつ感想をいただいてもよろしいでしょうか。

池田さん：今日はこのような機会をいただき、本当にありがとうございました。

私たちは市民の皆様の環境の活動をどんどん広めていって、そういったムーブメントを起こしていくためのアプリケーションをつくっています。その中で、皆さんがやられている活動というのは、本当にハッとさせられることが多くて、改めて市民の皆さんとの対話というのが我々企業にとっても重要だと認識しました。

庄司さん：今日参加させていただいて、いろいろな取組があること、皆さんが思いをいっぱい持っていらっしゃること、すごく伝わってきたんですね。そういった脱炭素はやっぱりやっていかなくちゃみたいな思いを後押しするように、前に市長もちらっとおっしゃっていたのですが、溝口の駅を降りたら、大きくドーンと脱炭素をやろう！とか、アクションみぞのくち！みたいな感じで、もっとPRをして、あ、しなくちゃいけないと、私がしていることはよいことなんだとか、何かそういう後押しするような見える化をやってほしいと思います。

田邊さん：今日、ゲストスピーカーの方もそうですし、参加者の方のいろいろな取組を私も初めて見聞きし

ました。すごく川崎市がいろんな方々がいろんな活動をされているという、ポテンシャルがあるということもすごく心強く感じました。

ぜひ、これからも企業さんと行政の方々と私たち市民で話し合っ進めていきたいと、アクションを具体的に起こしていきたいと思います。よろしくお願ひします。

中野さん：今日はありがとうございます。お話を聞いていて、まだまだ知らないことがたくさんあると思ひながら聞いていました。我々、かわさき若者会議、10代、20代ですね、やる気だったり、好奇心、行動力はあるんですけども、なかなか地域の情報だったり、人脈、知見といったもの、なかなか足りない面もありますので、そういったところを皆様方の知見等をお借りしまして、多種多様な属性、世代を巻き込んでご一緒に行動を起こしていけたらいいなと思っおりますので、何かご一緒にできることがあれば、どうぞよろしくお願ひいたします。

山城さん：僕自身も頑張らなきゃなど、たくさん思わされる会だったと思ひます。先ほど、多摩川の話とかいろいろ出ていたんですけど、やっぱり子供たちって、体験することによって学ぶことってものすごく多いと思っるので、そういうのは充実させていかなきゃいけないと思ひました。多摩川の話で言うところ、多摩川で初めに生き物と遊ぶという活動をして、そこからだったらきれいにしなきゃとって、ごみ拾ひの活動につながっていくというような授業も実際にあるんですね。

やっぱりそういうのって、脱炭素化のための取組でもあるんですけど、結局それがやっぱり川崎が好きだとか、自分のまちが好きだということにも何かつながっていく活動なのかなと思っるので、何かそういったところをもっともっと取組を充実するように委員会としても働きかけていきたいと思ひました。ありがとうございます。

市長：皆さん、それぞれにすばらしいご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。今のコメントもありましたけれども、ここきっかけなんだけど、それって1つで単体で終わってなくて、どんどんつながっていくという感覚ってとても大事だし、それが脱炭素アクションだと思っんです。先ほど、鈴木さんからコメントがあっって、関係ないと思っていたけどこういう絡み方ができるという気づきを、私自身も、あっそういうことがあるんですねというのを、今日、幾つもお話をいただきました。知らなかったということは、みんなやっぱり多いと思っんですよね。自分の活動は分かっているけど、隣の人、あるいはちょっと先の人って何をしていたのだろうかというところが、あっこんなことがあるんだと、多分もっともっといっぱい活動がこの高津区だけでもたくさんあると思っんですよね。

そういう人たちが、こんなことを、いつ、誰がどんなことをやっているのかというのがしっかりと情報発信、受発信できる環境のアプリもありますし、それ以外のところでもしっかりと情報発信して、あっこれだったら僕にできるかもしれないというふうな形で、小さなコミュニティーから始めるというのはすごく大事かもしれません。地域の自治会、町内会であったり、スポーツクラブであったり、あるいは会社の中であったり、あるいは子供たちの遊び場だったり、そういう小さなところから少しずつ発信していくと、一気にドミノが起こるという状況まで温めていかなくちゃいけないなと、今日はつくづく感じさせていただきました。

今日ご参加いただいて、皆さんにコメントしていただきたかったんですけども、ちょっと回しが悪くて大変申し訳なかったんですけども、ぜひこれからも脱炭素アクションをみんなで起こしていきたいと思っしますので、どうかよろしくお願ひします。

今日は本当にありがとうございます。